

Title	総括・挨拶
Author(s)	湊, 長博
Citation	京都大学 附置研究所・センター シンポジウム：京都からの挑戦 - 地球社会の調和ある共存に向けて (第11回) 「翔ぶ、京大」-報告書- (2017), 11: 125-126
Issue Date	2017-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/226420
Right	
Type	Presentation
Textversion	publisher

総括・挨拶

京都大学理事・副学長 湊 長博

ご紹介にあずかりました湊でございます。本日は本当に朝から長時間にわたりまして、長いセッションでありましたけれども、こんなにたくさんの方々においでいただき誠にありがとうございました。

特に、一般参加の方々はもちろんでありますけれども、文科省の来賓、それから特に東京都の教育委員会、それから高校、中学の諸君も、今日は随分お見えいただきました。また、引率された先生方も本当にありがとうございました。

今日は特に京都大学の研究所・センターの集まりの会ということで、途中でお話にも出ましたが、京都大学には、センター、研究所というのが一番たくさんあるところでございます。

今日は、6つ、お話がございましたけれども、これらは全て、この京都大学の研究のほんのごく一部でございます。特に研究所・センターというのは、大きな塊をつくって、ちょっと難しいんですが、研究連携基盤という塊をつくっておりまして、キーワードは未踏科学と言います。未踏というのは、まだ誰も足を踏み入れたことがない、手をつけたことがないという意味ですが、そういう未踏科学の分野を、いろんな幅広い分野の先生方が一緒になって、まだ人類が足を踏み入れてないような領域に踏み込んで新しい科学をつくるということです。

一方で、もちろん京都大学にはいろいろな学部であるとか、大学院もたくさんございます。実際そういう既にある学問の中にも未踏分野というのはあります。ですから先ほどの医学の話にも出ましたように、私は医学の人間ですが、医学の領域にも、まだ未踏の部分というのは、たくさんあります。そういったものを京都大学全体として切り開いていくというつもりで、私もはっております。総長も、そういうことを何遍も繰り返しお話しされました。

京都大学の我々教員といいますか研究者は、ざっくり言って3,000人ほどおります。極端な言い方をすれば、3,000通りのいろんな学問が京都大学で毎日行われているといっても過言ではないのかもしれませんが。

そういう意味では、さらに新しい人たちが来れば、新しい未踏を目指す人が、また一人増える、二人増える、そうして京都大学の大きな世界に向けた発信ができるのだろうというふうに思っております。

先ほどのパネルディスカッションでもございましたけれども、やはり「なぜ」という問いかけをして、新しいことをやるというのは確かに面白いんです。私も、そういうことを40年やってまいりました。

ただ一つ、付け加えさせていただくとすれば、自分がやってきたことが、どこかへ届く、世界の誰かに届く、苦しんでいる子供達に届く、悩んでいる人達に届く、必死に考えている

人達に届く、必要なところへ届く、誰かのためになる、という要素は非常に大事です。

つまり、自分の本当にオリジナルにやってきたことが、どこかへ届く。その届いたということを自分がわかったときに、実はやっているときはもちろん楽しいのだけれども、届いたときはもっともっと楽しい、これが本当の科学の喜びであろうと僕は思っています。

京都大学のホームページへ行ってもらいますと「京都大学の理念」というものがございます。これは何遍も先ほど出ましたが、地球社会の調和ある共存ということです、これは自分のことだけではなくて、しかも、さっきの東大との兼ね合いで、ちょっと出ましたが、日本のことだけでもなくて、地球全体の人類がどうして共存していけるか、さらに地球には人間だけではない、いろんな生き物がいます、大志万さんの話にもありましたように、地球全体の生きとし生けるものが、どうして調和ある共存を保てるか、そのためには我々は、どういう新しいことをやるか、新しくやったことが地球全体に、命に、どういう形で届くかということを考えていくことが、京都大学の最終的な理念であり目標であると思ってやっております。

今日は本当に若い諸君に、少し難しい話もあったかもしれませんが、私どもの大学が、こういったことを目指しているということを少しでもご理解いただけたらありがたいと思っています。京大には、教員だけでも 3,000 人、学生は 1 万人以上いますけれども、皆が一丸となって自分らが楽しみつつ、かつ多くの人に楽しんでもらえるような、そして世界に届くような学問と研究をやっているということを少しでもご理解いただければ、本日の研究所・センターのシンポジウムが意義あるものであったというように思っています。

本当に、今日は、長い時間でありましたけれども、最後までお付き合いいただきまして誠にありがとうございました。お礼を申し上げます。